

質問

滝口の武者について 滝口の武者について、次の質問に答えてください。

[回答者] 五味 文彦

質問一 滝口の武者が置かれるようになった理由は何ですか。

九世紀の末に摂政関白が置かれて天皇を支える摂関政治が始まるとともに、天皇を中心とする宮廷政治が整えられてゆきました。これを受けて宇多天皇は寛平年間（八八九～八九八）に政務を直接に支える蔵人所の充実をはかりました。

六位の蔵人の定員のうちから二人をさいて五位の蔵人を置き、内裏である清涼殿に昇殿する資格を、これまでのように位階によつて一律には決めず、天皇の代ごとに個々の官人の審査をして認める昇殿制を整えました。

天皇の側近が蔵人・殿上人として待遇され、内裏には参議以上の公卿、蔵人頭の指揮下の殿上人が伺候し、天皇を支える体制が生まれ、ここに宮廷社会の身分秩序が定まったのですが、そうしたなかで滝口の武者が一〇人置かれ、宮中の警備を行う

こととされたのです。「蔵人式」によりその職務も明確化されました。

質問二 どうして滝口の武者といわれたのですか。

清涼殿の東庭北方にある御溝水みかわみずの落ち口を滝口といい、ここに詰所（滝口所）が置かれたことから、滝口の武者と称されました。弓の芸にすぐれた武者が選ばれ、そのための試験（滝口試）も行われました。当初は位が六位、官職のない武者が基本的にあてられたのですが、滝口の人員が天徳四年（九六〇）に一〇人から増員され、さらに二〇人となり、有官の者からも採用されました。

御所に宿直しても昇殿は許されていません。宿直する滝口は、蔵人が取り次ぎ、その姓名を名乗る名対面なたいめん（問籍もんせき）を行いましたが、その声が内裏に響いて、滝口の存在を知らしめました。

質問三 職務は何ですか。

第一に宮中の警備です。寛仁三年（一〇一九）四月に京中の各所で強盗や放火が相次いだので、検非違使に京中の夜行が命じられ、滝口には宮中の放火犯を捕らえるよう指示が出されています。第二に天皇が乗船する際の供であつて、それもあつて淀川水系に勢力基盤をもつ渡辺党の武士が任用されています。

第三に天皇の命令を受けて遠所に派遣されること、第四に草木を栽えることなどもしました。以上は鎌倉時代に順徳天皇が著した『禁秘抄』に見えています。すなわち地下^{じげ}にあつて天皇に雑役を奉仕したのです。

なお弓の芸で選ばれた関係もあつて、競馬や相撲に堪能な者も多く、藏人所衆という武士との間で武芸を競い、またそのことから闘乱を起こすこともしばしばでした。

質問四 どのようにして選ばれましたか。

諸家からの推挙により選ばれました。永観三年（九八五）六月に藏人頭の藤原実資は五人を滝口に推挙しています（『小右記』）。天皇の関係者の推挙で任じられることが多く、鎌倉時代には幕府に御家人の推挙を求めています。承元四年（一二二一）○五月十一日に幕府は御家人中から滝口に伺候する武士として「小山、千葉、三浦、秩父、伊東、宇佐美、後藤、葛西」以下十三流の家をあげ、かつてのように滝口を寄せるよう命じています。

質問五 教科書で「滝口の武士」を「滝口の武者」と変えていますが、それは何故ですか。

十世紀の源高明が著した故実書『西宮記』に、「滝口武者」

として立項されており、発足の段階ではまだ武士の表現が少なかったことなどから、武者とするのが適当と考えたからです。天皇が退位すると、次代の天皇には三人が滝口として残り、多くが院武者所に奉仕するようになりますので、その点からも武者としたのです。

ただ武士の成長とともに、武士が任用されるようになったので、滝口の武士といっても間違いではありません。白河院の時には院武者所を強化するとともに、滝口を三〇人に一時増やしたことがあります。ただ白河院の時代から源氏・平氏の武士が台頭し、武家の権力を築くようになったため、その存在に押されてゆくようになりました。

質問六 滝口に関する話にはどんなものがありますか。

『今昔物語集』巻二十七の四十一話には、滝口の武者たちの行動がどんなものがよく描かれており、巻二十の十話には、陸奥国に派遣された滝口が上洛する際に信濃の国において体験した奇談が見えます。

質問七 滝口に任じられた人物にはどんな人がいますか。

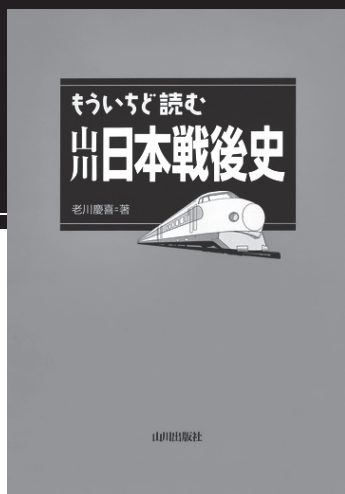
最もよく知られているのは、『平家物語』に見える横笛との恋で有名な滝口入道でしょう。これに該当する「滝口入道」は

斎藤時頼のことで、これを滝口に推挙したのは安徳天皇の乳母の帥（藤原領子）であり、この時の滝口は前代から継承された三人のほか、摂政や大臣などから一七人が推挙されています（『山塊記』）。

同じ『平家物語』に登場するのが渡辺競です。嵯峨源氏の渡辺党の出身で、滝口を経て左衛門尉となっています。源頼政の家人として保元の乱に出陣した後、治承二年（一一七八）正月には一本御書所の狐を射殺す功をあげ、治承四年の以仁王の乱では乱に加わりましたが、その時の逸話はよく知られています。平宗盛に降ったことを装って、宗盛の愛馬「何両」を得るや、頼政に加わり、馬のたてがみと尾の毛をそり、尻に「昔は何両、今は平宗盛入道」の焼印をして返し、宗盛を激怒させたということです。頼政の子仲綱が愛馬のことで宗盛から辱めを受けたことへの仕返しだったということです。

『徒然草』を著した兼好法師については、室町時代に歌人の正徹が著した『正徹物語』に「兼好は俗にての名也」「官が滝口にありければ、内裏の宿直に参りて常に玉体を押し奉りける」と、滝口であったと記されていますが、果たしてどうでしょうか。

（こみ・ふみひこ／放送大学・東京大学名誉教授）



もういちど読む 山川 日本戦後史

老川慶喜・著

現在使用されている日本史教科書の戦後史部分を全面的に書き改め、戦後70年の日本の歩みをわかりやすく記述。戦後の歴史を学ぶことで、今後、何を引き継いでゆくべきかを考えるための教養書。

A5判 224頁+口絵8頁 本体1,500円(税別)
ISBN 978-4-634-59113-4